

剣客商売

# 隠れ蓑

池波正太郎



劍客商売

# 隠れ蓑

池波正太郎

新潮社版



剣客商売 隠れ蓑

昭和五十一年十月二十日 発行  
昭和六十年九月十日 二十一刷

定価八五〇円

著者 池波正太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六五二

編集部(〇三)二六六五

振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社

製本・株式会社大進堂

© Shotaro Ikenami 1976 Printed in Japan

ISBN4-10-301213-7 C0093

目次

|          |     |
|----------|-----|
| 春愁       | 5   |
| 徳どん、逃げろ  | 41  |
| 隠れ簀      | 82  |
| 梅雨の柚の花   | 124 |
| 大江戸ゆばり組  | 165 |
| 越後屋騒ぎ    | 207 |
| 決闘・高田の馬場 | 249 |

装幀 玉井ヒロテル  
挿絵 中 一 弥

劍客商売

隠れ蓑





春 しゅん

愁 しゅう

桜花<sup>はな</sup>もさかりのころになると、鐘ヶ淵<sup>かねがふち</sup>の、秋山小兵衛の隠宅<sup>かくち</sup>へも、大川<sup>おほがわ</sup>（隅田川<sup>すみがは</sup>）辺<sup>べ</sup>りの其処<sup>そこ</sup>此処<sup>ここ</sup>へ行楽<sup>えんがく</sup>に出て来る人びとのざわめきが、つたわってくるかのようだ。「いまごろは、何処<sup>どこ</sup>へ出て行っても、さわがしくて気疲れするばかりじゃわえ」

小兵衛は、このところ、隠宅<sup>かくち</sup>へ引きこもり、一足も外へ出なかった。

今日も、小兵衛は居間に寝そべり、昼下り<sup>ひるまぎ</sup>の一時を、うつらうつらとすごしている。

おはるは、朝から関屋村<sup>せきやむら</sup>の実家<sup>きや</sup>へ野菜を取りに行き、まだ帰って来ない。

開けはなった障子の向うの庭先へ、人影がさした。

小兵衛は背中を向けたままで、

「どなた？」

「嶋屋孫助でございます」

「おお……」

振り向き、半身を起して、

「久しぶりだのう」

「ごぶさをいたしまして……」

「ま、あがりなさい」

「はい、はい」

「あいにくと今日は女の手がないのじゃが、ともかく、いっぱいやろう」

嶋屋孫助は、芝の増上寺中門前二丁目に店舗がある刀屋である。

〔御刀脇差拵所〕

の看板を掲げ、刀の鞘から柄、鐔や筭などに至るまで、いっさいの刀装をあつかい、よい職人を抱えているので、大身旗本の屋敷への出入りもすくなくない。

いま、小兵衛が差料にしている藤原国助の銘刀も、小兵衛の好みを知りつくした嶋屋孫助が苦心の刀装であった。

鞘は呂色鞘。柄は白鯨黒糸の菱巻き。名工・林又七作の秋草をあしらった鐔。むらさきの畝織りの下緒という上品な拵えで、

「さすがに、嶋屋じや」

去年の秋に、国助の銘刀を研ぎにやったのち、すっかり拵えも変えてみたいと、嶋屋にたのみ、刀装が出来あがってきたときは、

「ふうむ。さすがに……」

何日も何日も、その刀装をながめて飽くことを知らぬ秋山小兵衛だったのである。

「すっかり、あたたくなりましてございますな」

「わしも、あと幾度、桜花いくたばを見ることができるかなあ」

嶋屋は、小兵衛が出した茶碗の冷酒ひやまづを一口のんで、ふくみ笑いをした。

「おかしいかえ？」

「大先生おおは、おいくつになれました？」

「六十をこえたことは、たしかじゃよ」

「ならば、あと三十度は、桜花をごらんになれましょう」

「ばかをいうなよ」

「いえいえ、私のほうが、先へ、あの世へまいっておりますよ」

五十六歳の嶋屋孫助は、血色もよく、体格も立派なものだが、

「さよう、私なぞは、あと十年も生きればよいほうかと存じます」

嶋屋は、どこでまんだか知らぬが、人相手相みを看る。

それがまた、よくあたることを、嶋屋とのつきあいが二十年におよぶ小兵衛は何度も見聞きしていた。

しかし、自分が九十余歳まで生きるといわれたのは、今日がはじめてであった。

「嶋屋。そんなに生きていたのでは、たまらないな」

「何をおっしゃいます。御新造ごしんぞさまが、まだ、お若いのに……」

「それをいうな。はずかしいではないか」

小兵衛は、のみほした冷酒の茶碗を置き、

「さて、嶋屋。何か今日は、特別の用事があったのことはないな」  
ずばりといわれて、

「はい」

こうした小兵衛の、常人には計り知れぬ感能のはたらきを、よくわきまえている嶋屋孫助は、さして、おどろきもせず、

「一昨日のことでしたが……」

「ふむ……？」

「愛宕下の通りで、後藤角之助を……」

「角之助を、見かけたと？」

「はい」

小兵衛の両眼が、きらりと光った。

このごろ、おはるが餌をあたえるものだから、いい気になってあらわれる三毛猫が庭へ入って来て、遠くから小兵衛をながめている。

沈黙の後に、小兵衛が、

「おぬしのことじゃ。後藤角之助の居所を、つきとめておいてくれたろうな」

「はい」

「お前さんが、後をつけたのかえ？」

「愛宕さまの門前にある知り合いの茶店の亭主に、後をつけてもらいましたので」

「そうか。それで角之助は、どのような……？」

「むかしにくらべると、こぎれいな姿をしておりますよ」

「ほう……」

「したが、大先生……」

「む？」

「どうなさいますか？」

「どうもこうもないわえ。きやつめを見出したとあれば、斬って捨てずばなるまいよ」  
秋山小兵衛は、しずかにそういつて、煙管きせるを取りあげた。

一

その事件が起ったのは……。

小兵衛の息・秋山大治郎が父の手もとをはなれ、山城やましろの国おたぎ愛宕郡大原おはらの里へ隠棲いんせいしていた辻平つじへい右衛門えもんのもとへ修行に出た翌年であつた。

ちょうど十二年前のことになる。

そのころ……。

秋山小兵衛は、四谷仲町にあつた道場の主あるじであつた。

おはるは、まだ、十一歳の少女にすぎず、関屋村の父母のところにて、弟の子守こもりをしていたものだ。おはるが小兵衛の道場へ女中に出たのは、それから六年ほどのちのことになる。

当時、四谷の秋山道場といえは、小さな構えながら、

「知る人ぞ知る……」

実力をそなえた門人たちがいて、修行の激烈たさに堪えかね、新しく入門する者で、十人のうち一人か二人ほど残ればよいほうであつた。

したがって、門人の数が多いとはいえなかつた。

恩師・辻平右衛門の許もとをはなれ、独立したときの秋山小兵衛は、わが道場を拡張し、將軍ひざもとの大江戸に於ける名門に仕立てあげようという野心も無いではなかつたが、

「そのためには、ただ、おのれの剣を磨くだけではすまなくなる」

諸家の庇護をうけ、援助を受けるためには、自分自身と門人たちを鍛えることに劣らぬ精力をもつて、諸家へはたらきかけねばならぬ。

世辞もいわねばならぬし、汚濁のふるまいもあえて仕てのけなくては、大金を得ることはできぬ。

金がなければ、道場の拡張はのぞめない。

「やってやれぬことはなかったが……どうも、日々に道場へ出て、おもいきり稽古をせぬことは、生きてゐる甲斐がなかった。おのれの芸へ打ち込めば打ち込むほど、名利とは遠くなる。またとえば、わしが、世の中を巧みに泳ぎまわり、わが道場を押しひろげたとする。そうなれば、また、その大きくひろがった道場を持ちこたえるために、芸をそっこのけにして世の中を泳いでまわらねばならぬ。そうしたら、十年二十年は、またたく間にすぎてしまい、あつとおもうたときは、わしの剣術がつかいものにならなくなっていくよう。よほどに強い奴があらわれたりして、勝負をいどまれたとき、なまくらになったわしの体も、手足もいうことをきいてはくれぬというわけじゃ。これでは何のために道場をひろげたのか、わけがわからなくなってしまう。

いっそ、金がほしいのなら、剣術にかぎらず、別の商売をしたほうが、どれだけましなことから……まあ、そう考えたわけさ。

いづれにせよ、わしは生得、剣術が好きだったのだ。そこで、立身出世のほうはあきらめたのじゃ」

このようなことを、息子の大治郎にも洩らしたことはない小兵衛が、ほかならぬ刀屋の嶋屋孫助へ苦笑まじりに語ったことがある。

そのくせ大治郎には、

「お前の剣術は、いつになったら商売になるのじゃ？」

などといったりする小兵衛なのだ。

もしやすると小兵衛は、そうした自分の言葉へ対する息子の反応を、凝と見まもっているのやも知れぬ。

はなしを、もどそう。

その、十二年前の秋に……。

小兵衛の門人で、笠井駒太郎という若者が殺害された。

笠井駒太郎は、大和・高取二万五千石・植村駿河守の江戸藩邸にいる身分の軽い家来の一人息子であった。

入門したのは、十六歳のころで、剣の筋もよろしく、性格もひたむきで、師の小兵衛にはあくまでも素直に接しながら、他の門人たちとの稽古になると、先輩の剣士たちを相手に、外見はむしろ傲岸とも感じられるほどの堂々たる立ち合いをする。

叩きつけられ、突きまくられ、血だらけになって打ち倒されても、その態度はどこまでも対等の位をとり、稽古以外のときもへり下ったり、頭を下げたりはしなかった。

したがって、

「礼儀をわきまえぬやつ」

だと、ずいぶん憎まれたらしい。

ところが小兵衛は、内心に、

（若いうちは、あれくらいでないと、ものにならぬわ）

と見て、駒太郎の成長をたのしみにしていた。

ほとんど、口をきかない駒太郎を、あるとき小兵衛が、そっと居間へよび、茶と菓子を出して

やり、

「さ、すこしはしゃべってごらん」

こういうと、駒太郎は、

「道場へ来て口をききますと、気合いが逃げてしまいます」

と、こたえた。

その返答も、小兵衛は氣に入った。

果して、三年後の笠井駒太郎は、秋山道場でも十指の内へ入るほどの剣士になったのである。入門当時は、眼ばかりぎょろりと大きくて、痩せこけた体だったのが、見ちがえるほどの体格となり、挙動も落ちついてきた。

（いよいよ、たのしみになってきた……）

一人息子の太治郎を他国へ修行に出していた小兵衛だけに、駒太郎がひとしお可愛かったのであろう。

笠井駒太郎は、月のうち何日かを道場へ泊り込み、師の小兵衛の身のまわりの世話をするようにもなった。

もっとも、小兵衛が駒太郎へつける稽古は、その可愛さと対照的にきびしかった。

それだけに、彼が突然、殺害されたことを知ったときの、小兵衛がうけた衝撃は烈しく、悲しみは深かった。

笠井駒太郎を殺したのは、十二年後のいま、嶋屋孫助が居所をつきとめたという後藤角之助であつた。

角之助は、小兵衛の道場からも近い四谷千日谷せんいちにちだにに住んでいた浪人で、当時二十七歳。剣術も相応につかうし、人柄も氣さくで、時折、秋山道場へあらわれ、

「ちよいと、汗をかかせてもらいましようかな」

と、小肥<sup>こぶち</sup>りの体を、それこそ汗みずくにして、ころあいの門人を相手に稽古をしていたものだ。小兵衛は、角之助に、あまり関心がなかった。

なぜなら、小兵衛が道場に出ているときは、めったにあらわれぬ角之助だったからである。

嶋屋孫助は、小兵衛が不在の折に道場へ来て、二度ほど、角之助を見ている。

刀屋だけに、剣術の稽古を見るのが好きな孫助は、道場で見物をしていて、ほかならぬ笠井駒太郎から後藤角之助を紹介されたという。

そのとき、角之助は、

「いや、とてもとても……おれの差料<sup>さしりょう</sup>の拵<sup>こしら</sup>えをたのむような相手ではない。いずれ、ふところが暖かくなったら、たのむでしょう」

と、いったそうなの。

それで、嶋屋孫助は、角之助を見おぼえているのだ。

その後藤角之助が、なんのわけあって駒太郎を殺害したかは、いまもって、小兵衛にもわからぬ。

ただ、秋山小兵衛が、

（角之助を見つけたなら、斬って捨てる!!）

おもいきわめているのは、千駄ヶ谷の松平肥前守<sup>びぜんのかみ</sup>・下屋敷裏の林の中で殺されていた駒太郎の死体の上に、

「この者、笠井駒太郎を討つたものは、四谷仲町在住の秋山小兵衛なり」

と、したためられた紙が、小柄<sup>こづか</sup>で刺しとめられていたからだ。

このため小兵衛は、町奉行所の取調べをうけ、大いに迷惑をした。

そのうちに……。

同日の夕暮れ近い時刻に、千駄ヶ谷八幡宮の境内で、笠井駒太郎と後藤角之助が立ちばなしをしているのを、

「見かけましたよ」

と、いい出た者がいる。

これは、いつも秋山道場へ野菜を売りに来ていた千駄ヶ谷の百姓・為吉たけきちであった。

為吉は、道場の武者窓から、門人たちの稽古をのぞき見するのが好きで、駒太郎と角之助が立ち合っているのを何度も見ている。

為吉の証言を得たのは、現場の近辺の聞き込みを根気よくつづけていた四谷の御用聞き・弥七の手柄であった。

すでにそのころ、弥七は小兵衛の道場へ稽古かよに通っていたのだから、必死だったにちがいない。「それっ!!」

というので、捕手が後藤角之助の浪宅へ駆け向ったけれども、一足おそかった。

浪宅は「蛻ももの殻か……」で、以来、角之助は行方知れずになっていたのだ。

死体と共にあった件の紙の筆跡を照合すべきものは何一つ無い。

門人たちも、また、駒太郎の家族たちも、角之助が彼を殺害するような事情を何も知らぬ。

ただ、道場における二人は、よく稽古をしていたようだが、いわば角之助は正式の門人ではない。事件の半年ほど前から、ふらりとあらわれ、寛大な小兵衛の黙認を得て、

「体が、鈍なまってはいけぬから……」

と、稽古をさせてもらっていたにすぎない。そして、それは事実だったのであろう。後藤角之助もまた、剣術が好きだったのである。